

園の規範について保育者が課題と感ずること

—自由記述回答の分析から—

辻谷 真知子*

How are Practitioners Puzzled about Norms in Early Childhood Centers:

From Analysis of Descriptive Answers in a Questionnaire Survey

Machiko TSUJITANI

Abstract

Although there is an emphasis on children recognizing and considering the need for norms in early childhood education and care (ECEC), norms vary among ECEC centers and practitioners. The thoughts of individual practitioners have not been clarified. In this study, a questionnaire survey was conducted to understand the issues that practitioners felt were related to the norms in their centers. The 135 open-ended responses regarding the problems and concerns about rules in ECEC centers were analyzed and three results were presented. First, in situations involving children, individuality or independence was considered in contrast to norms, along with different ages and developmental statuses and the constraints of the ECEC environment. Second, the words meaning practitioners like teachers or caregivers were frequently used and differences and sharing of ideas among adults were a concern. Third, differences were noted in the ideas of the practitioners and parents, and sharing was emphasized. In conclusion, given the diverse values held by caregivers, sharing, and discussing opportunities are important among practitioners regarding the content of the norms, the need for unification, and the reasons for individual decisions.

Keywords: norms, early childhood centers, early childhood practitioners, thoughts, questionnaire

1 問題と目的

1.1 研究の背景

保育において「道徳性・規範意識」の育ちは従来から重視されており、最新の幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領（文部科学省, 2017; 厚生労働省, 2017; 内閣府・文部科学省・厚生労働省, 2017）においても「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の一つとして「道徳性・規範意識の芽生え」が位置付けられている。実際に子どもは園生活の中で、家庭とは異なる同年代の集団を経験するとともに、保育者が子どもに伝える生活習慣、子ども間の遊びで成り立つルール、園の文化に特有の事柄など、多くの規範の存在や理由を知っていく（辻谷, 2017）。前述の要領・指針において「きまり」とも表され、「き

キーワード: 規範、保育施設、保育者、考え、質問紙

* お茶の水女子大学基幹研究院人間科学系

まりの必要性に気づき、守ろうとするようになる」など子ども自身が気づくことが重視されている。近年では、大人が子どもに価値を示唆し、基礎を養えるようにするという捉え方から、子どもを主体的な存在とし、自ら道徳性や規範意識を形成していく存在として捉える教育観（湯浅, 2016）に変化したことも指摘されている。すなわち道徳性・規範意識の育ちを支える上では、守るべき内容があらかじめ定められているわけではなく、子ども自身による気づきや考えの構築を保育者が援助することが求められているとも考えられる。なお、本論文では「規範意識」の言葉で示されるように、きまりや約束、ルールとして明示されない事柄も含めて「規範」という言葉を用いる。

このように子ども自身が規範の存在や必要性に気づくことが重視されている一方、それらの事柄についての捉え方は保育者により異なる。例えば、子どもの規範意識や自己欲求優先的行動への捉え方が保育者により異なることが指摘されている（湯浅・押谷, 2013; 湯浅, 2019）。また別の例として、園には子どもの安全を守るために生じる制限があるが（辻谷, 2021）、安全やリスク等の捉え方でも保育経験（野田・山田, 2018）、性格特性やジェンダー（Sandseter, 2013）、園の環境や理念（秋田他, 2019）による相違が示されている。すなわち、園や保育者により規範の内容も捉え方も多様であるため、子どもへの援助もそれに伴い異なる可能性がある。ただし、その多様な規範に関して保育者個人がどのように捉えているのかについては明らかにされていない。この点を検討することで現場での課題を捉え、保育実践の中の規範をどのように捉え保育者間で共有するのかについて、議論の枠組みを示すことが可能になると考えられる。

1.2 規範に関する保育観を捉える視点

保育への考え方についてはこれまで主に「保育観」という言葉で多くの研究がなされてきた。その対象は多岐にわたり、先行研究を概観した松本（2019）によれば「保育における保育者の見方、捉え方」を示すものである。例えば保育観の形成や変容に着目した研究（梶田他, 1990; 藤木他, 2011）、保育者間での相違に着目した研究（中, 1996）、文化間比較を行った研究（梶, 1998）などがある。ただしその中で、保育者の示す規範や園の規範と保育観との関連は明らかになっていない。

保育観と規範との関連が明確ではない理由としては、以下2点が挙げられる。第一に、これまでの道徳性や規範意識に関する実践や研究では、明文化された規範よりも何らかの葛藤を伴う個別の場面における子ども理解や援助（文部科学省, 2001）、子どもと保育者の非言語的応答関係（松永他, 2013）などが扱われてきた。保育の中で子どもが言語的に規範を他者に示す場面の映像を保育者に見せてグループインタビューを行った辻谷（2019）では、遊びの充実や言葉の育ちなど多様な内容が議論され、必ずしも規範意識や園の規範については焦点化されないことが示された。規範に関して保育者の考えを明らかにするためには、個別具体的な実践場面ではなく、より抽象度の高い問いを用いて調査することが必要と考えられる。

第二に、規範の内容が多岐にわたるという点がある。要領・指針における「規範」「きまり」の内容に関しては共通認識があるわけではなく、前述の通り園や保育者により多様である。また子どもの発達に伴って、保育者や研究者から見た道徳性・規範意識の捉え方も変化する。例えば乳児の罪悪感の芽生えに着目した深津・岩立（2021）では担任保育者との相互作用の中での「後ろめたさ」の表出を示しているが、幼児期では規範を知りながら逃れる「第二次的調整」（secondary adjustment）（Corsaro, 1985; 保木井, 2017）、仲間入りの条件（青井, 2000）や主張を伝える方略としての提示（辻谷, 2018）などの存在も示されている。そして規範は常に明示されるわけではなく、いざこざや違反など何らかの出来事をきっかけに意識されるものでもあり、子どもが経験する個別具体的な出来事に依存する。また園外の公共の場やその時代の社会通念などの影響も受けて様々に変容する。保育者が絶対に守るべきことと捉えて子どもに伝えるのか、子どもとともに考えるのか、あるいは子どもの判断に多くを委ねるのかといったことも、規範の内容や子どもの育ち、園や社会の状況等により異なると考えられる。よって、保育者が具体的にどのような内容を思い浮かべ、どのような点で迷いを感じることかということも含めて明らかにする必要がある。

1.3 園の規範の多様性に伴う実践上の課題

園の規範の内容は多岐にわたる上、意識されるかどうかということも文脈に依存するため、焦点化した議論のしにくいテーマであるともいえる。一方で何らかの制限や禁止、是非や善悪の判断等に関わる個別の場面において、保育者間での捉え方の相違が様々な観点から指摘されている。

まず安全に関わる判断の相違である。野田・山田(2018)では、ある1つの幼稚園の中で新人保育者11名とベテラン保育者5名に対するインタビュー調査を実施し、ヒヤリハットの件数や語りの内容を比較している。その中では、新人保育者が遊びの見通しを十分に持てないために必要以上に遊びの制止や声かけをして遊びの流れをとめてしまう可能性が提示されている。また同調査の中で「遊びのルール」が最も多く指摘されたのが「滑り台とブランコ」であったとされるが、この「滑り台」に関連して、境他(2022)では滑り台のKYT(危険予知トレーニング)図版を使用した質問紙調査およびインタビュー調査から、リスクの価値について消極的であり普段から安全の確保を第一に考えている保育者は、リスクの存在に肯定的な保育者やリスクについて固定の方針を持たない保育者と比較して、リスクとして認知するものが増える可能性を示している。そして、同調査ではリスクの認知・考え方ともに経験年数との関連は見出せなかったとしている。また安全のための制限や禁止については、質問紙調査から、登り降りや物を積む高さの制限、戦いごっこの許容範囲など多様なルールの存在が示されている(辻谷, 2021)。すなわち、保育の中で重視されている安全やリスクという観点でも制限や禁止のあり方は多様であり、それらは経験年数のみでは決まらず、園の中でも保育者の考え方によって異なる可能性があることがわかる。さらに安全以外の点でも、食事習慣や園の中で使っても良い場所などに関する習慣やきまりに関して、同じ園の中でも回答者により相違が見られる(辻谷, 2020)。このうち食事習慣については、食事場面における子どもの「困った行動」に対して、保育者が声かけ以外にも食事指導を行っており、有効であった内容が経験年数により異なることが質問紙調査から示されている(伊藤, 2020)。このように、園生活の様々な場面において、保育者による制限や何らかの習慣づくりに向けた働きかけなどの内容、すなわち園の規範として子どもに伝わりうる事柄は多様であることが想定される。

以上より、園の規範については議論を焦点化しにくい一方で、その捉え方や設定の仕方の多様性から、保育者個人にとっては多様な迷いが生じやすいと考えられる。それらを言語化することにより、実践の中でどのような内容を共有することが有効なのかについても示唆を得ることができるであろう。

1.4 本研究の目的

以上より本研究では、園の規範についての保育者の捉え方を、特に課題と感ずることに着目し探索的に検討することを目的とする。前述のように個別具体的な場面では規範に限定されない多様な議論が生じることから、本研究では規範の内容を具体化しない質問による自由記述回答から、保育者の捉え方を探る。

2 方法

2.1 調査の概要

東京都内6区^{注1}の認可保育所・幼稚園・認定こども園および幼保一体施設等を含む636園に質問紙を配布し、190園(30.0%)から返送いただいた。実施時期は2019年6~8月である。質問紙は1園につき3部を配布し可能な人数で回答いただくこととし、合計471名(保育所118園323名・幼稚園53園148名)の回答を得た。役職の内訳は、担任63%(n=296)、主任15%(n=69)、園長8%(n=40)、フリー5%(n=25)、副園長3%(n=16)、補助加配等1%(n=5)、その他3%(n=16)であった(兼任等による複数回答を含む)。実施にあたり白梅学園大学の倫理審査委員会の承認を受けた(承認番号201903)。

分析の対象とした項目は「保育でのルールについて、迷ったり悩んだりすることがあれば、その内容を教えてください。」という自由記述項目である。この項目に先立ち、園における具体的な習慣やきまりと対応や援助、子どもにとってのルール、危険なため禁止している遊びとけがの捉え方等についても選択肢および自由記

述により尋ねた。なお「規範」という言葉では具体的な実践を思い浮かべにくいと想定し、また特定の場面のみで生じる遊びのルールなども広く含める必要性から、調査においては主に「ルール」という言葉を用いた。その定義は明示せず、調査の冒頭において「本調査の「ルール」は、習慣、きまり、子どもにとってのルール等を幅広く含めています。そのため質問内容には、状況や考え方によっては「ルール」として捉えないような内容も含まれている可能性があります。」とのみ示した。

2.2 分析方法

上記の自由記述項目において記述のあった135名分の回答を分析対象とした。第一に、多く使われる言葉や同時に使われる言葉を元に回答の全体像を探るため、KH Coder (樋口, 2014) を使用し各回答を単位として頻出語および共起ネットワークを確認した。この方法は社会調査の計量テキスト分析の方法として2001年から公開されているソフトウェアであり、伝統的な内容分析 (content analysis) の考え方を活かして開発されたものである。第二に、回答の全体像に基づきカテゴリーを生成し記述内容を分類検討した。

3 結果

表1 頻出語の出現回答数と比率

3.1 頻出語および共起ネットワーク

頻出語 (10名以上で使用された語) の出現回答数および135名全体に対する比率を表1に示す。この中で「子ども」(n=55) は「ルール」に次いで多いが、保育者等の園内の大人を示す「保育者」「保育士」「職員」「大人」「先生」「教員」のいずれか1つ以上に言及した回答の数 (n=54) も同程度に多かった。なお「大人」(n=6) はいずれも園内についての記述であったため保護者ではなく保育者等と判断した。具体的な内容としては「危険」「安全」「ケガ」の語から、安全のためのルールに関する内容が多く記述されたと考えられる。

さらに共起ネットワーク (図1) から、「子ども」と「ルール」「危険」「遊び」「考える」「思う」、「保育者」と「同士」「違う」、「保育士」「職員」「保護者」と「難しい」がそれぞれ同時に出現する傾向が示された。また「意識」と「共有」、「共通」と「理解」、「価値」と「統一」も同時に出現する傾向が示された。すなわち、子どもとルールとの関係については特に遊びや安全に関わる文脈で記述されており、一方で保育者同士や保護者との関係など、大人同士での意識や考え方の違いや共有、統一等についても課題として記述されていることが示された。

3.2 回答カテゴリーと分類結果

頻出語の結果 (3.1) をもとに、「特になし」(n=6) を除く129名について「(1) 誰とのやりとりにおいて課題を感じているのか」「(2) どのような内容について課題を感じているのか」の2点に着目し、カテゴリーを生成・分類した。カテゴリーと分類結果を表2に示す。まず、「(1) 誰とのやりとりにおいて課題を感じてい

順位	抽出語	回答数(%)	順位	抽出語	回答数(%)	順位	抽出語	回答数(%)
1	ルール	58 (43.0)	21	声	11 (8.1)	41	良い	7
2	子ども	55 (40.7)		必要		42	クラス	6 (4.4)
3	危険	27 (20.0)		迷う			共有	
4	難しい	26 (19.3)	24	ケガ	10 (7.4)		禁止	
5	思う	22 (16.3)		園			考え	
6	遊び	21 (15.6)	26	環境	9 (6.7)		自身	
7	考える	20 (14.8)		考え方			大人	
8	保育	19 (14.1)		自由		48	意識	5 (3.7)
9	感じる	18 (13.3)		特に			価値	
	悩む	18 (13.3)		理解			気持ち	
	保育者	18 (13.3)	31	行動	8 (5.9)		個人	
12	違う	15 (11.1)		自分			子	
	保護者			守る			場合	
14	職員	14 (10.4)		制限			状況	
	多い		34	それぞれ	7 (5.2)		人	
	保育士			共通			生活	
17	安全	13 (9.6)		作る			判断	
18	経験	12 (8.9)		対応		58	遊ぶ	
19	伝える			統一				
	決める	11 (8.1)		同士				

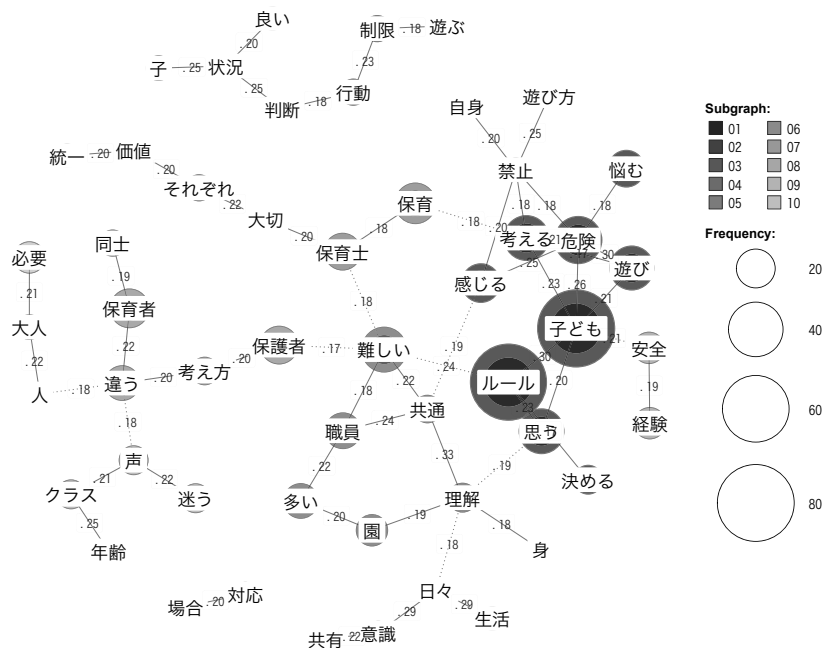


図1 記述に含まれる語の共起ネットワーク（最小出現数5、上位60）

表2 誰とのやりとりで/どのような内容について課題を感じているのかに関する
 カテゴリー・定義・回答数・比率（「特になし」を除く129回答に対する比率）

		(1) 誰とのやりとりにおいて課題を感じているか*						
カテゴリー	定義	① 子ども	② 保育者間	③ 保護者	複数	不明	他	総計
ルール全般への考え方	a 保育観	0 (0)	12 (9.3)	3 (2.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	15 (11.6)
	b 決定・共有	5 (3.9)	15 (11.6)	1 (0.8)	1 (0.8)	0 (0)	0 (0)	22 (17.1)
	c 範囲・解釈	3 (2.3)	5 (3.9)	0 (0)	0 (0)	2 (1.6)	0 (0)	10 (7.8)
具体的な内容・判断	d 年齢・発達	6 (4.7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	6 (4.7)
	e 制限の内容	11 (8.5)	2 (1.6)	1 (0.8)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	14 (10.9)
	f 安全性	17 (13.2)	5 (3.9)	7 (5.4)	0 (0)	0 (0)	2 (1.6)	31 (24.0)
	g 主体性	6 (4.7)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	6 (4.7)
h 複数	2文以上の記述や箇条書き等で、異なるカテゴリーの内容が書かれている。あるいは、1文でも並列の助詞で異なるカテゴリーの内容が書かれている。（これ以外は、基本的には1回答1カテゴリーとして判断する）。	3 (2.3)	3 (2.3)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	6 (4.7)
x 詳細不明・他	以下のいずれか：(1) 迷ったり悩んだりすることに該当せず、意識・大切にしていることを記述している。(2) ルール以外の保育全般に関する内容のみが書かれている。(3) ルールとの関連が不明。(4) 迷いや悩みの内容が不明。	3 (2.3)	5 (3.9)	2 (1.6)	0 (0)	2 (1.6)	7 (5.4)	19 (14.7)
総計		54 (41.9)	47 (36.4)	14 (10.9)	1 (0.8)	4 (3.1)	9 (7.0)	129 (100)

*「保育者間」：「職員」「保育士」「教諭」等も含む。「複数」：①～③のうち2種類以上。「不明」：誰とのやりとりなのか不明で、文献からも判断できない回答。「他」：迷ったり悩んだりすることに該当せず、意識・大切にしていることを記述している。

るのか」は、「子ども」が最も多く「保育者」「保護者」と続いていた。なお「保育者」には「保育士」「職員」「先生」「教員」も含む。次に「(2) どのような内容について課題を感じているのか」は、ルール全般への考え方として3カテゴリー、具体的な内容や判断として4カテゴリーが見出された。定義の詳細は表2の通りである。回答の約20%にあたる26回答について、調査目的を知らない保育学研究者が独立に評定した。(1)については $\kappa = .74$ 、(2)については筆者と評定者のいずれかが「複数回答」を選択した回答を除く22回答にお

いて $\kappa=.57$ であった。分類を再考した上で、不一致箇所は筆者が判断した。以下では表2における(1)(2)の対応を参照し、(1)のそれぞれで回答数・比率が高いカテゴリー3番目まで(表2網かけ部分、③保護者については $n=1$ のカテゴリーを除く2番目まで)に着目して、カテゴリーごとに記述の具体例(斜体)を示し検討する。手書きによる回答のため、文の区切りを示すと思われるスペースは句点(、)に置き換えて示した。

まず「子ども」とのやりとりで特徴的な内容としては、「d. 年齢・発達」「e. 制限の内容」「g. 主体性」が該当する。「d. 年齢・発達」では、子どもの発達が一人ひとり異なるためにそれぞれに合った対応やルールの設定が難しいことが示された(例:「発達の差が大きいため、個々に合った遊びや援助の提供が大変であり、難しい」「ひとりひとりの子に添った(発達段階に応じた)ルールがあってもよいと思うが、集団生活の中では難しいこと。ユニバーサルなルールでありたいと思うが現実的にはどうすべきか悩むことが多い」「危険度が高い為、全体では禁止のルールだが、子どもによっては出来る子がいる為、難しいと感ずることがある」)。「e. 制限の内容」では、具体的な事柄について制限すべきか否かという迷いや、実際には制限したくないがせざるを得ない状況などが記述された(例:「室内自由あそびで、保育室の中で使っても良い素材の限度」「人数が多いと制限が多くなってしまふ」「裸足で泥あそび等が出来ない」「子どもがやりたいと思った事が環境的に無理だった場合の対応や、一人ひとりの思いがあるのにすべて受け入れてあげられない事など」)。「g. 主体性」では、ルールによる制限と、主体性、自由などという子ども自身の思いや考えを示す言葉とが、対立的または対比的に示されていた(例:「どこまで子どもを"見守る"のか、子どもの自由を尊重するのか」「ルールを決めすぎること、子どもが自分で考えることが減ってしまふ、子どもの主体性が失われてしまふように感ずる」「ある程度のルールは必要だが、それに縛られすぎて自分で考え行動できなくなってしまうことは困る」「ルールを決める事によって行動が制限されたり、萎縮してしまふ事があるので、子ども達の自発性を奪う事に繋がる恐れがある。子ども自身が考え、判断できる余地を残しておけるように配慮したいと考えている」)。

次に「保育者間」で特徴的な内容としては、「b. 決定・共有」と「c. 範囲・解釈」が該当する。まず「b. 決定・共有」はルールが保育者間で異なるときや決まっていなるときなどに、異なること自体への迷いや、どのように共有したり決めたりするのかといった方法の難しさが記述された(例:「園で決まったルールを共通理解するのが難しい」「給食のルール、遊びのルールは個人の感ずでも左右されるので、意見が合わなくなつたときに迷つたり悩むことがある」「公園などで、他園と遊具の使い方(守るべきルール)が異なる時」)。また「c. 範囲・解釈」では、既存のルールであってもその柔軟性や解釈の仕方についての相違が迷いにつながっていることが示された(例:「同じルールでも保育士によってとらえ方の違ひを感ずる時(子どもへの伝え方)」「どこまではOKでどこからがダメか…?という線引き」「保育士によって、状況によって変化するルールについて、保育士間で伝わっていない時がある」)。

また「保育者間」「保育者-保護者間」の両方に特徴的な内容としては「a. 保育観」が該当する。ルール自体ではなく前提や背景にある「価値観」「保育観」等の相違が記述され、主にその相違自体や共有の必要性を課題とする内容であった(例:「保育者同士でも価値観が異なる」「時と場合によってという対応は子どもには難しく、そこを保育者の価値感の違ひから統一できていない。話し合ひの場がなかなか時間に余裕がなくできない」「子どもにどう育てほしいのかどういふ力を身につけさせたいのか、など周りの保育士や保護者と共有しにくい時」「教育要領のねらいや内容、国や区で目指している保育に対して、保護者の認知が低い為、職員の方向性と、保護者の意見や要望にギャップが多く、生じている感ずがある」)。一方、保育者間での相違を前提とした記述も1名でみられた(「子どもへの接し方については価値観がそれぞれ違ひうため、統一すべきところと、そうでないところがあること」)。

最後に、「子ども」「保育者間」「保育者-保護者間」の全てで記述されていたものとして「f. 安全性」がある。「子ども」では主に、具体的な場面でのどのように対応するかについての迷いが記述されていた(例:「ケガにつながりそうなことの見極めが難しく、どのタイミングで声をかけるかを迷う時がある」「多様性のある遊具を使って、子どもが危険性のある遊びや行動をとっていた時、判断や声のかけ方に迷うことがある」)。

「保育者間」では考え方や経験の相違から、実際の対応に悩むことが示されていた（例：「自由に遊んだり、行動することで考えるきっかけや気づきにつながると思うが、保育者によってルールの範囲が違うので、危険なく過ごす方を優先するのか、子どもの育ちを優先させるのか悩むことが多い」「どこまでが安全で、どこまでが危険なのか？人によって考え方が違うため、子どもの主体的な遊びを止めてしまうことがある」「（前略）ひとりがしっかり保育できていても、みきれない保育士もいると、同じように行動する子どもたちゆえに、常に禁止した方がよいのか？とまよところである」）。そして「保育者-保護者間」では、保護者との関係からけがを防ぐことや、各家庭により安全の考え方が異なることが示されていた（例：「保育中のけがや子ども同士のトラブルなどは、子どもの成長過程で経験すべきものと考えていますが、保護者の中にはけがについて対応が難しかったり、保育士としては朝登園した時のまま保護者に引き渡すことは基本と考えていますので、以前より保育士は敏感になっています」「子どもそれぞれの家庭環境や、保護者の考え方によって、安全を守る基準も違う。ルール化するのではなく、それぞれに合わせて対応したいと考えているが、難しいこともある」）。

以上、カテゴリーの分類結果および記述例から、結果4点を集約して示す。第一に、子どもについては個々に応じた対応や、保育者個人のねらいと異なる制限の存在、また子どもの「主体性」とルールとの兼ね合いが課題とされている。第二に、保育者間では園の中での不統一、決め方や共有の仕方、さらに既存のルールへの解釈の仕方や適用の範囲の相違が課題とされている。第三に、保育者間や保育者-保護者間といった大人の間では保育観の共有や相違が課題とされている。第四に、子どもへの対応・保育者間や保護者対応等全てにおいて、安全性に対する考えのあり方が課題とされていた。

4 考察

本研究では「保育でのルールについて、迷ったり悩んだりすること」に関する保育者の自由記述回答を分析し、園の規範への捉え方や課題と感ずることを探索的に検討した。結果から3点について述べる。

4.1 規範が関連する保育場面における保育者の判断

保育者が実際に子どもと関わる個別具体的な場面における判断の迷いには、結果3.1より、その子どもの遊び方や安全性、保育者との関係といった個別の状況だけではなく他の保育者や保護者とのやりとりも関連している可能性が示唆された。それらは「意識」や「考え方」の「共有」といった言葉で示され、保育者間での共有、保護者への対応などについての課題があった。

その上で、保育中の子どもとのやりとりにおける直接の判断に関わる内容としては、結果3.2より、子どもの年齢や発達、既存の規範や環境の制約といった周囲の状況があり、また子どもの主体性をいかに保障するかといった課題も生じていた。これらの内容は「道徳性・規範意識」という内容に限らず保育のあらゆる場面で重視されている。このうち「主体性」については、これまで様々な議論が行われてきた中で、保育者個人の葛藤を生じさせていること（小倉, 2013）が示されている。また近年では川田（2019）が子どもの周囲との関係の結び方として主体性を捉えることの重要性を指摘している。本研究において主体性は「自発性」「自由」などととも、「規範」とは対置されたり、対比的に捉えられたりする傾向にあることが示唆された。この点は質問紙調査において、園の「習慣」「きまり」「ルール」という視点から尋ねたことも影響していると考えられる。実際には子ども自身も幼児期になると規範を作り出したり他者に示したりしており（辻谷, 2014; Göckeritz et al., 2014）、また守ることそのものではなく「気づき、守ろうとするようになる」ことが重視されている（厚生労働省, 2017; 文部科学省, 2017; 内閣府・文部科学省・厚生労働省, 2017）。そのため、園の規範は子どもの主体性と相反するものではない。ただし規範を守るべきもの、守れるようにすべきものとして捉えた場合、保育者にとって目の前の子どもの思いや考えとは両立しないように感じられる場面があり、課題として捉えることにつながっていると考えられる。そのため、保育者が規範の変容性や柔軟性をどのように捉える

のかということも重要であり、次節で述べるように他の保育者や保護者との共有のあり方について詳細に検討する必要があるだろう。

また安全に関する判断も、子どもと関わる場面での課題として記述されていた。次節以降で述べるように保育者間での共有や統一も課題であるが、園全体で安全のために統一された規範があったとしても、個別具体的な場面では必ずしもその子どもにとって最善ではないと考えられる場合がある。特に遊具の使用可否や、想定と異なる使い方などについては、その子どもの発達や周囲の子どもとの関わりなど、保育者の判断に関わる事柄は多岐にわたる。リスクに関わる研究でも保育経験との関連が検討されているが（野田・山田, 2018）、様々な場面における判断を実践知として共有していくことが重要であるだろう。

4.2 規範の内容に関する保育者間での共有のあり方

では、保育者間の共有にはどのような課題があるのだろうか。結果 3.2 より、保育者間では規範の決定と共有の仕方とともに、既に共有された規範についても解釈や適用する範囲の相違が課題となることが示された。この点では、保育における規範の特徴を捉え直すことが手がかりになると考えられる。

保育における規範は明確に定義されていないが、冒頭で述べたように、生活習慣、遊びのルール、安全のための制限など多様な内容が関連する。すなわち子どもが園生活を通じて知ったり、守る必要性を感じたりする内容を幅広く含む。また多くの子どもが家庭以外での集団生活を初めて経験する場でもあり、集団特有の規範を知るきっかけが多いことにもよる。一方で発達心理学においては、子どもが2歳から4歳にかけて、集団や権威等に関わらず守るべき道徳的規範と、集団や権威等によって変容する慣習的規範（Turicel, 1983）の区別が可能になることが示されている（Smetana et al., 2012）。すなわち子どもも園生活の中で、絶対的な規範なのか否かについての区別を捉えていく時期にあるといえる。さらに本研究の結果において子どもの「d. 年齢・発達」として示されたように、個々の子どもの理解力や危険回避能力など、一人ひとりに応じて保育者が柔軟な対応を行う。よって、クラスや園においてある程度共有された規範も、全ての場面で守ることを期待されるわけではない。個別具体的な状況により保育者の判断が異なり、保育の中では園外の社会と比較して、柔軟性が保障されている内容も多くあると考えられる。

ただし、園生活の中では子どもが様々な規範の存在に気づいていくため、子どもへの伝え方や制限の内容などが保育者により異なると子どもの疑問や混乱につながることから、保育者が統一の必要性を感じることもある。このように園の規範は状況や視点により、柔軟なものにも統一すべきものにもなりうる。

以上より、園の規範に関して保育者間で共有する際に、それらの柔軟性について各保育者がどのように感じているのか、という点も共有することが重要になるだろう。また統一や明文化を行った後でも、個別具体的な場面に応じて判断が異なることを前提に、その理由を保育者間で共有する機会も重要といえる。

4.3 保育者個人の保育観への着目

規範の具体的な内容や判断の理由を議論する上で、結果 3.2 の「保育者間」「保育者-保護者間」で示されたように、保育観の共有が重要と考えられる。前述のように保育観に関する研究は多く蓄積されているものの、その定義は研究により異なり、またそれらの視点は実践の中で十分に活用されているとはいえない。本研究における保育観に関する記述では、規範の内容と同様、保育者間での相違や共有の仕方、すり合わせの仕方、また保護者への伝え方等が課題として捉えられていた。一方で「統一すべきところと、そうでないところ」という回答にある通り、実際には同じように考えることを目指すのではなく、個人に委ねる事柄と、方向性を共有すべき事柄について、各園で考えていくことが必要と考えられる。

また、保育観は自由記述例にもあるように「価値観」という言葉で表され、保育場面だけでなく社会生活における様々な考え方を含む。中でも、例えば規範と関連の深い道徳観に関しては、その相違を捉える尺度が作成されている（Haidt, 2012; 金井, 2015; 村山・三浦, 2019）。そして前述のように、子どもの規範意識の捉え方が保育者によって異なることも明らかにされている（湯浅・押谷, 2013）。保育においてもこの点を踏まえ、

保育者自身の価値観の相違を前提とした保育者間での考えの共有のあり方を検討する必要があるだろう。保育の中で、子どもへの対応や実際の場面について議論されることは多いが、保育者個人の価値観が言語化されるかどうかは、取り上げる実践事例や議論のテーマなどにより異なり、共有の機会が十分でないと考えられる。また保護者に対しても、背景の多様性や個々に応じた支援の必要性については様々に論じられてきたが、保育者による価値観の相違との関連で論じられることは少ない。

このような保育観の相違には、子どもの育ちへの捉え方や道徳性、道徳観などといった様々な内容の他に、園の規範がいかにあるべきか、どの程度統一されている必要があるのかという、規範そのものに対する考え方の相違も含まれるだろう。さらに本研究の結果より、園の規範について保育者間で議論することが、逆に保育観の共有に有効である可能性もある。この点を踏まえ、具体的な規範や様々な場面を手がかりとして、園の中の保育観の共有や保護者との共有のあり方を検討していく必要があると考えられる。

5 課題と展望

本研究では園の規範について保育者が課題と感ずることを検討し、子どもだけではなく保育者間あるいは保育者-保護者間での共有、また具体的な規範の適否だけでなく共有の仕方や保育観など複数の課題が関わっていることが示された。ただし質問紙調査であることから、記述の背景にある保育者個人の経験や思い浮かべる場面等については詳細に検討できていない。本研究をもとに、インタビュー調査や保育場面の観察調査等を通して、園の規範についての保育者の捉え方をより体系的に整理し検討したい。

注1. 配布対象の6区は事後調査の可能性も踏まえ、過去の研究協力園が含まれる区および調査者自身の近隣区（当時）とした。また自治体のWebサイトに掲載されていた施設の全てに配布した。

謝辞

ご多用の中で調査にご協力くださった保育者の方々に心より感謝申し上げます。

付記

本研究は、調査の実施にあたり JSPS 科研費（18J01873）の助成を受けた。また本論文は日本乳幼児教育学会第31回大会（2021年12月）で発表した内容に基づき検討を加えたものである。

引用文献

- 青井倫子(2000). 幼児の仲間入り場面における規範の機能. 『幼年教育研究年報』22, 45-52.
- 秋田喜代美・石田佳織・辻谷真知子・宮田まり子・宮本雄太(2019). 園庭を豊かな育ちの場に：質向上のためのヒントと事例. ひかりのくに, 36-55.
- Corsaro, W. A. (1985). Features of peer culture and children's conception of adult rules. *Friendship and peer culture in the early years*. Ablex Publishing, 171-270.
- 藤木大介・上田七生・樟本千里・若林紀乃・越中康治・松井剛太・長尾史英・山崎晃(2011). 認定こども園への移行が保育者の保育観に及ぼした影響. 『梅光学院大学論集』, 44, 11-21.
- 深津さよこ・岩立京子(2021). 幼児期初期の罪悪感の芽生えとしての“後ろめたさ”の表出. 『保育学研究』, 59, 33-44.
- Göckeritz, S., Schmidt, M. F.H. & Tomasello, M. (2014). Young children's creation and transmission of social norms. *Cognitive Development*, 30, 81-95.
- Haidt, J. (2012). *The righteous mind: Why good people are divided by politics and religion*. Phanton Books.
- 保木井啓史(2017). 保育者の期待に対する子どもの身の処し方の研究. 『教育学研究ジャーナル』, 20, 31-39.
- 伊藤優(2020). 幼児の食行動別にみた保育者の食事指導意識. 『日本家政学会誌』, 71, 445-455.

- 梶田正巳・杉村伸一郎・後藤宗理・吉田直子・桐山雅子(1990). 保育観の形成過程に関する事例研究. 『名古屋大學教育學部紀要』, 37, 141-162.
- 金井良太(2019). 『脳に刻まれたモラルの起源：人はなぜ善を求めぬのか』. 岩波書店.
- 川田学(2019). 『保育的発達論のはじまり：個人を尊重しつつ、「つながり」を育むいとなみへ』. ひとなる書房
- 厚生労働省(2017). 保育所保育指針.
- 松本佳代子(2019). 保育者の保育観に関する研究動向. 『共立女子大学家政学部紀要』, 65, 143-154.
- 松永愛子・大岩みちの・岸本美紀・山田悠莉(2013). 3歳児の子ども集団の「規範意識の芽生え」における保育者の役割. 『保育学研究』, 51, 223-234.
- 文部科学省(2001). 『幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集』. 文部科学省.
- 文部科学省(2017). 幼稚園教育要領.
- 村山綾・三浦麻子(2015). 日本語版道徳基盤尺度の妥当性の検証 — イデオロギーとの関係を通して—. 『心理学研究』, 90, 156-166.
- 内閣府・文部科学省・厚生労働省(2017). 幼保連携型認定こども園教育・保育要領.
- 中俊博(1996). 保育者の保育観—幼稚園と保育所の比較からみた—. 『和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』, 6, 129-142.
- 野田舞・山田真紀(2018). 園庭遊具の遊びの価値と安全性を高める方法についての実証的研究—ハザードとリスクの概念を中心に—. 『保育学研究』, 56, 39-50.
- 小倉定枝(2013). 保育における「主体性」言説に関する考察—1989年後を中心に—. 『千葉経済大学短期大学部研究紀要』, 9, 13-23.
- 境愛一郎・宮田まり子・秋田喜代美・大澤洋美・久留島太郎・箕輪潤子(2022). 遊び中のリスクに対する認知と考え方の関連性—KYT 図版への指摘数の比較から—. 『乳幼児教育学研究』, 31, 27-38.
- Sandseter, E. B. H. (2013). Early childhood education and care practitioners' perceptions of children's risky play; examining the influence of personality and gender. *Early Child Development and Care*, 184(3), 434-449. DOI: 10.1080/03004430.2013.794797
- Smetana, J.G., Rote, W.M., Jambon, M., Tasopoulos-Chan, M., Villalobos, M. & Comer, J. (2012). Developmental changes and individual differences in young children's moral judgments. *Child Development*, 83, 683-696.
- 榊瑞希子(1998). 保育実践ビデオ記録の交換批評による「良い保育」観の国際比較. 『研究紀要. 短期大学部』, 31, 119-126.
- Turiel, E. (1983). *The development of social knowledge: Morality and convention*. Cambridge, England: Cambridge University Press. 53.
- 辻谷真知子(2014). 4歳児クラスにおける幼児間の規範提示：根拠の明示と関係性に着目して. 『保育学研究』, 52, 197-209.
- 辻谷真知子(2017). 保育場面における規範に関する研究の動向と展望. 『東京大学大学院教育学研究科紀要』, 56, 213-222.
- 辻谷真知子(2018). 3～5歳児の言語的やりとりから捉える規範意識：根拠を明示しない規範に着目して. 『保育学研究』, 56, 63-74.
- 辻谷真知子(2019). 規範に関する保育観(2)—規範を示す幼児への保育者の解釈に着目して—. 日本教育心理学会第61回総会発表論文集, 509.
- 辻谷真知子(2020, September 19-30). 規範に関する保育観(3) 園の習慣やさまりの実態[要旨掲載]. 国際幼児教育学会第41回大会, Web開催.
- 辻谷真知子(2021). 保育における安全のための遊びのルールについての検討 — 「リスクな遊び」の分類を手がかりに—. 『国際幼児教育研究』, 28, 83-98.
- 辻谷真知子(2022). 子どもの「けが」に関する保育者の考え方の傾向：保育者・園による相違に着目して. 『こども環境学研究』, 18(2), 61-66.
- 湯浅阿貴子(2016). 幼児の規範意識の形成に関する研究の動向. 『昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要』, 25, 65-83.
- 湯浅阿貴子(2018). 幼児期における道徳的規範意識の形成に関する研究. 風間書房.
- 湯浅阿貴子・押谷由夫(2013). 幼児の規範意識の形成に対する保育者の保育観に関する一考察. 『学苑初等教育学科紀要』, 872, 40-58.